

観光資源としての海の活用

招聘研究員 李 鳳 姫

1 問題の提起

観光は地球村最大の産業で、多くの雇用と所得を創出する未来型産業として注目されている。このような観光は、余暇時間の拡大と所得水準の向上で、より一層発展することが予想されており、特に多様なテーマを求める近年の観光ニーズの変化により、伝統的観光から滞在型、体験型、冒険型などへの多くの進化が予想される。

鳥取県は約144キロの海岸線に沿って、鳥取砂丘、浦富海岸を始めとする15個の海水浴場が分布している。特に太平洋沿岸と異なり、海岸線の人工的埋立が多くなく、自然環境がそのまま残され、美しいリアス式海岸と砂浜海岸が交互に現れる美しい景観を有している。また重要港湾である鳥取港と境港を始めとして大小の港が合わせて10カ所あり、新鮮な海産物が豊富な地域である。

しかし、このように多様で豊富な海洋観光資源を有しているにもかかわらず、これらを観光客誘致に十分に活用できておらず、もどかしい状況である。夏の海水浴場も週末だけに人々が集まっており、リアス式海岸の絶景である浦富海岸でも遊覧船が行ったり来たりするだけで観光客が少なく、平日には恐ろしいほど閑散としている。なぜこのように美しい海に観光客がいないのだろうか。砂丘を訪れる観光客だけでも清くて美しい海を楽しむことができるようにする方法はないだろうか。既存の港や海水浴場が海洋観光の拠点としての役割を果たすことができないだろうか。

本稿では、海を観光資源として活用するために、まず海洋レジャー活動の種類を類型別に整理し把握するとともに、近年、国土交通

省と水産庁で推進しているブルーツーリズムに関する概念を考察した後、鳥取県の海を観光資源として活用するためのいくつかの提案をする。

2 海洋レジャーの定義及び種類

海洋レジャー活動とは、日常から抜け出して行われる余暇活動のうち、空間的には海域と沿岸に接した地域で行われる活動で、直接または間接的に、海洋空間へ依存したり関連して行われるあらゆるレジャー活動をいう。海洋レジャーは、海洋依存型と海洋関連型に区分でき、海洋依存型は一般的にその活動類型によって、スポーツ型、休息型、観光型（探訪型）などに区分されている。

スポーツ型は、多少ダイナミックな類型で、ボート、モーターボート、水上スキ、水上オートバイ、ウィンドサーフィン、サーフィン、スキューバダイビング(シュノーケリング)、スキューバダイビングなどがこれに含まれる。

休息型は、主に海浜地域を中心とする休息とレジャーを兼ね合わせたもので、海水浴、潮干狩りなど、海浜動植物の採取行為及び海釣りなどを上げることができる。

観光型は、遊覧船と旅客船などを利用した海上遊覧と観光潜水艇及び海中展望台のような海中景観の観覧などである。

海洋関連型は、ビーチスポーツ、砂遊び、海浜レクリエーション活動と海洋景観眺望、海洋文化探訪などを上げることができる。

3 ブルーツーリズム

ブルーツーリズムとは、地域の漁業や美しい自然景観、伝統文化など、多様な諸資源を

表 - 1 海洋レジャー活動の種類

海洋依存型	スポーツ型	サーフィン、ウインドサーフィン ヨット及びボート（セーリングヨット、カヌー、ジェットスキー、モーターボート等） ダイビング（スキンドайビング（シュノーケリング）、スキューバダイビング等） ゴムボート、パラセーリング、水上スキー、水上オートバイ
	休息型	海水浴（水泳、水遊び、日光浴等） 干潮時の狩猟（潮干狩り等、海浜動植物採取） 海釣り（海岸釣り、岩場釣り等）
	観光型	海上遊覧（観光遊覧船、クルーズ旅客船等） 海中観光観覧（観光潜水艦、海中展望台等）
海洋関連型		ビーチスポーツ、砂遊び、海浜レクリエーション活動等 海岸景観眺望、散策（散歩）、ジョギング等 海洋文化探訪（海洋生物観察、文化財踏査等）

資料：イ・スホ「海洋レジャー産業の現況と展望」2001

生かして、都市住民に多様な余暇活動を提供する漁村滞在型余暇活動をいう。ブルーツーリズムは、持続可能な観光（sustainable tourism）やグリーンツーリズム（green tourism）など環境親和的な観光概念のひとつである。観光が行なわれる地域の特性によって、青い海岸での観光をブルーツーリズム“blue tourism”、雪で覆われた山岳地域での観光をホワイトツーリズム“white tourism”、陰緑濃い田園での観光をグリーンツーリズム“green tourism”と呼ぶところに由来している。

したがって、ブルーツーリズムの場合も漁業者が兼業で運営する宿泊施設を利用して、漁村の生活、文化、自然を含む各種観光資源を都市と漁村住民間の交流を通し、地域活性化に活用するものである。また次のようなグリーンツーリズムと類似の側面を持っているといえる。

まず、観光目的地としてあらゆる農漁村の潜在力を活用しようということである。これまでのただ見るだけの観光から抜け出し、直接参加する体験型観光として、農漁村に滞在しながら安心安全な農水産物を、直接栽培や収穫したり、農漁村地域の文化と田園生活を体験する観光として観光地を多様化するのに

寄与することができる。

次に、持続可能な開発戦略である。ブルーツーリズムやグリーンツーリズムは、持続可能な開発戦略として、大規模な外部資本でなく、住民たち自身が観光資源を開発して、観光客にサービスを提供する主体になるために、所得の外部流出を最小化でき、経済的持続可能性が維持することができる。また、他の地域と差別化できる独特の歴史文化的観光商品を提供して、観光客等の再訪問を誘導するために、固有の文化と自然を保存し、快適な環境を維持、保存せざるを得ない。すなわち、環境と文化の持続可能性を維持する観光である。

最後に、農漁村地域活性化の新しい手段として把握されるべきだということである。農漁村は、都市化、工業化によって、労働力の流出と高齢化を招き、90年代に入ると農水産物の価格不安定、農水産物市場の国際社会への開放などで、多くの困難に直面している。したがって、観光客を誘致して農漁業者が民泊と郷土料理、特産物の開発、各種イベント開発などで、その地域の独特の生活と文化資源を活用して、農漁業の活路を見いだすことができる。

観光は、農漁村地域の活性化のための重要

な戦略的開発の手段にすることができる。すなわち、住民が主体となって小規模投資でも多様な波及効果を得ることができるため、持続的な農漁村開発を触発し、維持するための有用な手段となることができる。

したがって、ブルーツーリズムは次の要件を充足する観光といえる。一つ目に、あるがままの自然の中で行われる観光として典型的な農村、漁村、森林が中心になる。手つかずの自然をそのまま感じて、見て、滞在しながら楽しむことが中心になる。

二つ目に、サービスの主体が農漁者等その地域に居住する人々であるという点を上げることができる。つまり、大規模な外部資本で設置されたレジャー施設が中心でなく、訪問者はその地域住民から、直接、サービスの提供を受けるのである。

三つ目に、都市住民と農漁村住民間の交流を通して、農漁村の生活、文化など各種の資

源を保存しながら、地域社会に貢献できるものである。具体的な形態では、農漁村で経営する民泊、レストラン、キャンプ場、農水産物販売所などがあって、低価格の料金で新鮮な食べ物の提供を受けることもできる。

以上述べたとおり、ブルーツーリズムは海洋レジャー活動の下位概念として、その特徴は次のとおり一般的な海洋観光と似ているが、異なる点も存在する。それぞれ比較したものが表2である。

4 観光資源として海を活用するための提案

これまで述べてきた内容に基づいて、鳥取県が観光資源として海を活用するための4つの提案をする。

最初の提案は、国土交通省と水産庁が推進している“ブルーツーリズム”の積極的な活性化である。今年、鳥取県と「都市と農山漁村との相互交流宣言」を結んだ東京都武蔵野

表 - 2 海洋観光と漁村観光の比較

区分	海洋観光	ブルーツーリズム
活動	レクリエーション、スポーツ等活動的特性が強い。海洋レジャースポーツ、休息、休養等（観光、レジャー中心）	休息的、体験的活動が強い。生態、景観、社会文化、産業等の体験中心（休養、教育中心）
空間	全ての沿岸空間（海洋及び海岸線周辺、主に指定観光地が多く活用される。よって名勝景観地が多い）	漁村空間に限定（漁村漁港の周辺地域、大部分が未指定観光地、都市及び観光需要の高い漁村地域）
形態	海洋リゾート、マリーナなど人工的な形態	漁村での資源、産業、文化資源をありのままの自然として利用し楽しむ活動
特性	環境親和的	環境親和的
主体	観光業者あるいは海洋レジャー主管業者。漁民は補助者あるいは傍観者	漁民が主体
投資規模	大規模投資が多い	既存の水産関連投資の延長あるいは若干の小規模施設補完次元の投資
施設	大規模施設が多い	既存の小規模余裕施設利用
観光客との関係	漁民 - 媒介者(観光旅行社等) - 観光客の関係が多い	漁民と観光客の直接的接触が高い
対象層	一般観光客	教育、体験目的の家族、同好会、学生等

キム・ソンギョ等(2001)「漁村観光類型別開発方案研究」韓国海洋水産開発院P31

市の59家族約200名を、自然体験に招待した行事は代表的なブルーツーリズムの例である。このような交流を通して、居住地以外の人々が美しい鳥取県の海の恵み、農村での生活を楽しんで帰った。もちろんこのような行事を通して観光客が急速に増加することは少ないが、少数ながら固定客が夏のひとときでなく四季を通じた持続的な再訪につながるものと予想される。

二つ目の提案は、鳥取港を海洋観光の拠点に育成することである。鳥取港にはヨット係留場が付設されていて、新鮮な海産物等を購入できるマーケットや食堂街のある「かろいち」が運営されている。8月には子どもから大人まで楽しめるカニの博物館「かにっこ館」も開設した。このほかに広い駐車場を確保して鳥取港は海洋観光の拠点に潜在力は備わっている。さらに次の2つを追加すれば海洋観光拠点としての機能が向上するだろう。ひとつは観光遊覧船だけでなく、観光潜水艦あるいは側面や底を透明ガラスとした遊覧船を運航させ、鳥取港から砂丘を過ぎ浦富海岸まで海中の動植物を観察することができる海底遊覧を実施すれば鳥取県の新たな魅力をひとつ増やすことができる。もうひとつはヨット体験学校の開設である。現在、係留場に泊まっているヨットを活用して観光客にヨットに乗る教育と合わせ乗船できる体験企画を提供することである。さらに、ヨットが海岸沖の海上を漂えば、観光客を海に引きつけるだろう。

三つ目の提案はマリンスポーツを楽しめるインフラ整備である。マリンスポーツの種類は多様であるが、鳥取県はサーフィンとスキンドビングに特化することを提案する。青谷町の夏泊海岸から白兔海岸に至る国道9号線を車で走りながらよく見る光景は、海を楽しむサーファー等である。国道周辺に、サーファーが安全にスポーツを楽しむことができるサービス施設と駐車施設などを用意すれば、若者が押し寄せる活気のある海のまちになることだろう。また、浦富海岸はスキンドバイバーがよく訪れるところである。スキンドバイピン

グは、マスク、シュノーケル、フィンのような簡単な器具を利用して少しの間息を耐えながら水深10メートル未満の浅い地域で楽しむ潜水を言い、シュノーケルを利用して呼吸するために、シュノーケリングと呼ぶこともある。このように美しい海中世界を楽しむことができるスキンドビングは特別な専門教育が必要なく、簡単な訓練だけでも楽しむことができるので、海中世界体験学校を運営すれば観光客を継続して確保することができる。

最後の提案は、海を楽しもうとする観光客を年々増加させながら維持管理するため、毎年観光客に対してアンケート調査を実施して観光客のニーズがどのように変化しているかを科学的に分析し、対応策を講じることである。そうでなければ激しい観光客誘致競争に後れをとることになるだろう。

(韓国・江原発展研究院 研究委員)

参考文献

- 1 国土交通省(2003)、
- 2 財団法人自由時間デザイン協会(2002)レジャー白書 2002
- 3 月刊観光2002年7月号特集「海を活かす」23~51
- 4 月刊観光2003年8月号特集「海の恵み」21~50
- 5 石原照敏ほか編(2002)「新しい観光と地域社会」古今書院
- 6 フンク・カロリン(2003)瀬戸内海におけるブルーツーリズムと「海の駅」の可能性、季刊中国総研(2003)vol.7-1、No.22、pp11-18
- 7 http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/blue_info1.html
- 8 http://www.chuhakou.com/marine/whats_umieki.htm
- 9 http://kanko.pref.tottori.jp/tokei1/toukei_tottori-ism/index.htm
- 10 イスホ(2001)「我が国の海洋レジャー産業の現況と展望」
- 11 キムソンギユ等(2001)「漁村観光類型別開発方案研究」韓国海洋水産開発院